事　例　2　　学習や行動をパターン化して理解するＢ男の「わかる」

（1）対象生徒のプロフィール

・生徒　　高等部３年　男子　（小学部より入学）

・主な障害　自閉的傾向

・コミュニケーション

あまり自分から話しかけることはなく要求場面はほとんど見られないが、どうしてもしなければならない時にできないことがあると、教師のそばにきて言葉ではなく指さしなどの行動で示す。独り言は多い。

また、簡単な指示や聞き慣れた言葉は正しく聞き取りができるが、初めての指示や少し難しい言葉になると聴覚情報だけでは難しいので、文字カードや絵、写真カードなどの視覚情報を示す必要がある。自分の名前や提示した文章は、漢字を交えて書くことはできるが、作文など自分で考えて書くことは難しい。

・保護者の希望（４月時のアンケートより）

進路は市内の福祉作業所を希望している。日常生活では、「学校での出来事を家で話してほしい」「挨拶をしたり、声をかけられたら答えたりできるようになってほしい」「感情を表現してほしい」の３点を希望している。

エピソード１：一度、登校後急に泣き出すことがあった。泣いている理由がわからず、どこか痛いか尋ねると「痛い」と答えたり、「熱あるの？」の問いに「熱ある」と答えたりと、問いかけることをくりかえすばかりで要領を得なかったが、保護者に連絡して原因を聞いてみると、朝、姉に叱られてそれを思い出して泣いたのではないかと言われた。そのことをＢ男に尋ねても「そうだ」とは言わなかったが、うまく自分の思いを相手に伝えられる手段があれば気持ちを察することができるのにと、もどかしかった。

エピソード２：高１の時の作業で長机を他生徒と運ぼうとした時、親指を机に挟んで骨にひびが入ってしまったが、痛いことを伝えられず真っ青な顔になる。しばらくして表情がいつもと違うことに気づき、見ると親指が変形していた。あのとき、大声で痛いと言ったり、泣いたりしていればすぐに気づくことができたのにと悔やまれる。

Ｂ男は穏やかな性格で学校生活では毎日の流れがわかり、指示なしでも行動できる。日程変更があっても視覚情報を示すことで理解して行動できる。ただ、学習や行動をパターン化して理解していると思われ、全く予期しない場面では聞き慣れた指示でもどうしてよいかわからず動けなかったり全然違う行動をとってしまったりすることがある。

例えば、下校の際に「着替えしよう」と言うと、すぐに更衣室に行って着替えをすることができる。しかし教育実習の時、自分の体にあったサイズのＴシャツを選び実際に着てみるという授業があり、実習生がＴシャツを持たせて「着替えておいで」と言ったが、どうしてよいかわからず、引き出しからノートを取ってくるという行動をとった。

上記の例からも学習をパターンで理解していることがわかる。

（2）課題選択の傾向

初めての挑戦学習では意味がわからないまま選んでいたようだが、2回目以降はシステムがわかり自分のやりたい課題を選んでいた。

運動が好きなのでそれに関するものがあれば迷わず選ぶが、ない場合でもその時の課題の中から興味あるものを選んでいると思われる。

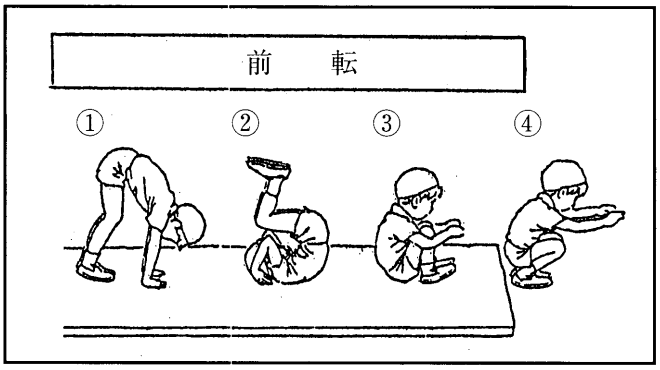
（3）練習の様子と手立て

「マット運動」の課題では基本の技をいくつか組み合わせて連続技ができることを目標とした。まずどの技ができるか実態把握を行った。横回り、前転、後転、三点倒立、首倒立の技を順に試してみた。ところが技の名前を言ってもマットを指さして言った言葉を繰り返すだけで動くことができなかった。

技の名前の文字が書かれた説明図を見せる

横回り、前転、後転は説明図を見せると動くことができた。図に①②・・と番号がつけられているが、自分で「一番」と言いながら説明図と同じ形になって動こうとしていた。

やはり視覚的情報がB男には有効であることがわかった。



図Ⅳ－2　前転の説明図

前転の練習では常にマットの左側で説明図を見せていたが、ある時マットの右側でその図を見せたところ、急に体の向きを変え後転をしようとし始めた。最初はどうして後転をするのかわからなかったが、前転の図を右側からみると後転をしているように見えることがわかった。B男は番号は言っていたが、それは単なるその時の番号であり順序数の①と理解していたのではなかったのだろう。番号より図の方を理解の手立てにしていたことが推測される。

後転では右手がどうしても体を押しあげることができなくて曲がってしまうが、これは説明図を使って説明をしてもうまくできなかった。

ビデオでB男の後転と教師の模範演技を撮って見せる

ビデオを見せながら右手が曲がっている部分を指摘し、その後、教師の模範演技を見せたがはっきりと違いがわからないようであった。もう一度マットで後転をさせてみたが、右手は曲がったままであった。

教師の模範演技を見せながら途中動きを止めて手のつき方を見せる

その時は一緒に見ながら手を耳の横に持っていって真似をしていたが、実際にやってみるとやはり右手は曲がったままであった。

これらのことから、手のつき方は頭ではわかっているができないと推測され、練習の回数を増やすことでできるようになるのではないかと考えた。

回転の途中で曲がった右手を教師が援助して正しい形にする

体を両手で支えるタイミングを見計らって教師が右手を正しい形に直すと、その時はうまくいくが、一人でさせるとまた元にもどってしまう。これは9時間という限られた練習の時間内でできるようになるには難しいと考え、右手が曲がった状態ではあるが後転をすることにした。

次に三点倒立は実態把握の時に怖がってやろうとしなかったので首倒立をすることにした。しかし説明図を見せたが動けなかった。過去に体力作りの授業で経験しているがそれと結びつかなかったらしい。

B男の横で教師が見本を見せながら一緒にやってみる

首倒立の形を思い出したようですぐに真似をして寝た状態で足を挙げた。両腕の支えが弱く体が「くの字」になる。両腕に力を入れて支えることをわかってもらうため腰に両手をあてさせるが、そこで腰を支えることをわかってもらう方法を見いだせないまま終わってしまった。

次にB男ができるのではないかと判断し、跳び込み前転の練習を始めた。これは、B男にとって初めての技である。

具体物を用意し跳び越えることを意識する

本来は何もない状態で跳びこんで前転をするのだが、B男が練習する時は跳び越えることを意識させるため、高さ20cm、奥行き15cm程度のミニハードルを3個並べてそこを跳び越える練習を行った。その時ハードルに触ってはいけないことを告げた。だめという禁止の指示が好きなのでにっこり笑って「触ったらだめよ」と言いながらゆっくりとハードルに触らないように意識して遠くに手をついて越えていた。最初は越えるだけだったが、練習を重ねるうちに少しだけだがジャンプして跳び越えるようになった。

4つの技ができるようになったので、跳び込み前転、前転2回、首倒立、後転2回という流れを教師が考え連続技の練習を始めた。

連続技の順番を覚えて行うことはB男にとって難しかったので、4つの技の説明図を順番に見せながら練習した。すると、跳び込み前転はミニハードルがあるので何も見なくてもでき、そのあとの前転も説明図を見てスムーズにできた。ところが首倒立と後転はどちらも後ろ向きで始まる技のために混乱し、首倒立のあと後転ができなくなってしまった。説明図を見せても回転の途中で止まってしまうのだった。

教師の模範演技を見せる

これはB男にとって効果があったようで後転を止まらずに行うことができた。

発表では練習の時と同様、最初の跳び込み前転ではミニハードルを使用し、説明図を見せながら連続技を行った。どの技もスムーズにでき特に首倒立のあとの後転が心配だったが止まることなくできたのでパーフェクト合格となった。

（4）考察

聴覚だけより視覚的な手がかりがあれば理解して行動できるB男の場合、説明図は効果的であったが、それ以上に教師の模範演技を見て真似をしてやってみることがより効果

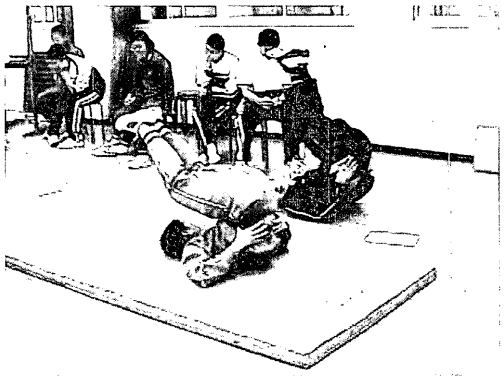
的であることがわかった。人の真似をすることが得意な面を生かしたことが、わかる手立てに結びついたと考えられる。ビデオによる説明は焦点を絞りにくく、模範演技よりインパクトがないので「わかる」にはつながらなかったようである。

また、B男は学習の積み重ねによりものごとを理解したり行動を獲得したりしていくので、教師の模範演技で正しいやり方を真似してやっていくうちに技を覚えできるようになると考えられる。

マット運動だけでなく他の学習場面においても正しい見本をみせて一緒にやってみることがB男にとって「わかる」の第一歩につながっていくであろう。

高2の時、現場実習先で箱折りができず、手が止まってしまっていたが、その後学校に戻って作業の時間に担当の教師から箱の折り方を教えてもらい、なんとか自分で折れるようになった。そして、3年の実習では同じ実習先で箱折りを最後まで自分でできるようになっていたので指導員がびっくりしたと報告を受けたことがある。これらのことからも、自分でわからないことを意思表示するのが難しい生徒には、その生徒のことを知る教師や周囲の人がどうすればわかるのか、どう支援すればいいかを伝えていく必要がある。B男の場合、卒業後に進む進路先に初めてのことは言葉だけでなく文字や絵、写真などを見せて説明をしてほしい、仕事のやり方も言葉だけでは理解が難しいので、正しいやり方を最初に示してあげてほしいことを伝えていこうと考えている。

（柳　生　美由季）



教師の見本を見ながら首倒立するB男